

# 禪淨両者の交渉性

光 地 英 学

## (一)

親鸞・道元両聖の時代に、禪淨両者の間に交渉関係があった人達がある。そのことについて、羅列的に記述してみるところとする。

(一)高倉天皇承安元年(一一七一)叡山の学僧覚阿(一一四三—一一八二?)は入宋し、圓悟克勤の資、杭州靈隱寺十六世瞎堂慧遠(一一〇二—一一七五)から臨濟禪の楊岐派の禪を嗣承して帰朝した。この覚阿は、法然上人に自己伝持の禪の衣鉢を相授したといわれる。そのことを「獅子伏象論」と次の如く記載している。「叡山西塔有<sub>二</sub>覚阿上人謂僧<sub>一</sub>。入<sub>二</sub>宋国<sub>一</sub>七箇年、就<sub>二</sub>仏海遠禪師座下<sub>一</sub>聞<sub>二</sub>仏心禪宗<sub>一</sub>、開悟發明。一大事嗣法、伝<sub>二</sub>達磨以来心印血脈<sub>一</sub>歸朝。而居<sub>二</sub>叡山<sub>一</sub>集<sub>二</sub>大衆<sub>一</sub>述<sub>二</sub>談話<sub>一</sub>。三千徒中唯独源空得<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>開悟發明<sub>一</sub>一大事。阿歎曰、此国之人根機末<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>仏心宗旨<sub>一</sub>、源空独能得<sub>レ</sub>解。実是非<sub>二</sub>直也人<sub>一</sub>、即如来

化身耶。達磨再誕聊言已、而以<sub>二</sub>伝来衣鉢達磨以来血脈飾袋<sub>一</sub>等<sub>二</sub>悉皆授<sub>二</sub>于上人<sub>一</sub>。」(法然伝全集九九〇頁下)

即ち叡岳三千の徒衆中、唯一人よく悟道を領解した法然に對する畏敬の念裡の伝授である。

また、はじめ道元禪師の門下で後に証空の弟子となった天王寺如一のあることも、禪淨両者の交渉関係として留意すべきでもあろうかと思われる。

また師蛮「延宝伝灯録」卅四(京兆大谷寺源空大師)に次の如く記載している。「元久三年春、弥陀觀音勢至三像、現<sub>二</sub>千室中<sub>一</sub>。師八宗之外涉<sub>二</sub>仏心宗<sub>一</sub>。或曰、参<sub>二</sub>覚阿禪師<sub>一</sub>。一日談<sub>二</sub>円頓菩薩大戒<sub>一</sub>之次、上足幸西、問曰、此戒已以<sub>二</sub>諸法至極<sub>一</sub>為<sub>二</sub>戒体<sub>一</sub>也。然智証大師曰、諸法至極為<sub>レ</sub>禪、若然此戒与<sub>レ</sub>禪同也否。師曰、此教内理法也、彼教外心法也、何以為<sub>レ</sub>同乎。得悟之人説<sub>レ</sub>戒、弥契<sub>二</sub>正理<sub>一</sub>。且禪人説<sub>レ</sub>教教随<sub>レ</sub>禪。教者説<sub>レ</sub>禪禪成<sub>レ</sub>教。凡以<sub>二</sub>真言之觀法<sub>一</sub>不可<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>禪。何況自余少乘之宗乎。

師著「金剛寶戒章、專以禪為本也。」（大日本仏教全書七〇・五九下（六〇上））この文中の問答は、法照とその資幸西との間に交されたものと思われるが、法然の禪戒一如・教禪一致に立っての禪と戒、教と禪との性格づけが示されている。そのことはそのまま、法然上人の禪に対する理解の深さを物語るものでもある。

次に文治二年（一一八六）秋に法然に帰依したとみられる俊乗房重源は、葉上房榮西の実弟であるが、彼について「円光大師行状画図翼賛」六に次の如くある。「俊乗房重源は姓氏未詳。大系図に、長谷雄三男、式部少輔淑信十一代之孫。滝口左体允紀季重有<sub>三</sub>子。所謂、季良、季康、重源<sub>入唐之人也、大和尚俗名重定</sub>又紀氏系図に、季重有<sub>三</sub>四子、所謂、季良、季康、榮西<sub>建仁寺開山、榮上僧正、重源<sub>入唐上人大和尚</sub></sub>（浄土宗全書）十六・一七〇下）とある。この中、「大系図」には榮西のことを記録していないが、「紀氏系図」（統群七輯上）には榮西のことが記載されている。「千光略年譜」「興禅護国論」巻中などを総合してみると、重源は仁安元年（一一六八）入宋、翌年五月榮西と共に天台山、阿育王山に登り、九月一諸に帰朝している。また重源はその入寂の年の建永元年（一一〇二）六月、榮西から菩薩戒を受けている。即ち重源にみられる法然（浄）と榮西（禪）の禪淨関係である。

（二）善慈房証空上人（一一七七—一二四七）は治承元年、加賀

権守源親季の長男として生れ、九歳の時、懇望されて一門の久我内大臣通親の養子となった。つまり道元禪師より二十三歳年上の義兄である。道元が出家を發願した建曆二年（一二一二）は、証空の三十六歳に当たっている。十四歳の折、当時五十八歳の法然上人のもとに入室、はじめ解脱房と号し、後、善慧房と改めた。信空・感西に次いで三番目の入室である。師法然の入寂まで二十三年間常随し、浄土の法門をことごとく伝授され、また法然の推薦により日野の願蓮に天台を、政春・慈円・公円に台密を学んだ。建久九年（一一九八）「選択集」撰述の際、証空二十三歳、選ばれて勘文の役をつとめた。このことは証空の「選択密要決」一（西山全集二・一八五上）及び「浄土法門源流章」（浄土宗全書）十五・五九六上）に出ている。翌正治元年（一一九九）師に代って九条兼実邸に赴き、「選択集」を講じた。元久元年（一二〇四）延暦守衆徒の専修念仏停止の訴えに答え、法然が天台座主に送った「七箇条起請文」には、第四番目に署名している。証空は初め小坂に住し、法然入滅後は慈円の譲りを受けて、西山善峰寺北尾往生院に移った。世に西山証空というのはこのことからであり、また後世その派をも浄土宗西山派という。証空はこの派祖である。安貞二年（一二二八）法然寂後の念仏教団の統率者信空が入寂するや、信空に代って指導者となった。寛元元年（一二四三）後嵯峨帝に円頓戒を授けて弥天国師の号を賜った。「曼荼羅

鈔」十卷の著がある。入滅は宝治元年十一月二十六日、時に七十一歳。

前記の如く証空は道元の義兄に当たっているから、道元の撰文に証空に関するものが見当たらないにしても、俗縁のつながりで往訪連絡もあり、道元が証空から教誨も受けたであろうことが推測される。なお瑩山「伝光録」狐雲懷辨章に、懷辨師が「浄土の教門を学し、小坂の奥義をきよ」（常法大師全集一九九頁）とある。懷辨が大日能忍の上足、仏地覺晏、次いで道元に参じた以前、このように証空に深くその浄土教を学んだことが知られ得る。懷辨頂相の自賛は、「罪業所感醜陋質、人中第一極非人」という句で始まっている。遺偈にもその前半に、「八十三年如<sub>ニ</sub>夢幻<sub>一</sub>、一生罪犯覆<sub>ニ</sub>弥天<sub>一</sub>」（三大尊行状記）とある。懷辨は禅僧として、稀れにみる罪業意識の強い人であるが、それには証空らの影響が考えられる余地のあるように思われる。

(三)九条兼実についてであるが、兼実は道元の母伊子の父であり、外祖父に当る松殿基房の弟である。京都愛宕山の北、東福寺の東、月の輪山に山荘を造居していたところから、兼実のことを月輪殿ともいう。建久元年（一一九〇）朝廷の実力者であったこの摂政九条兼実が、女を後鳥羽天皇の中宮に入れるや、道元の父ともみられている内大臣源（久我）通親は、それに対抗して、能円法師の妻で後鳥羽天皇の乳母となって

いた高倉範子を自分の側室にし、能円の女在子を自分の養女にして、天皇の後宮に入れた。そしてやがて生誕した皇子が、幸運にも皇太子になるや、通親が皇太子の外祖父という地位を利用して、親幕派の兼実を失脚させたのである。つまり兼実は通親の中傷によって関白・氏長者を辞しているのである。親鸞聖人の出家鬚髮剃除は、兼実の弟慈円（慈鎮）によってであった。

当兼実について注目されねばならないことは、法然第一の外護者であるという点である。法然と兼実との関係は、兼実の死に至るまで極めて親密であった。そのことは「玉葉」「明月記」「愚管抄」その他法然伝などの示しているところである。殊に建仁二年（一一〇二）法然によって出家したこと、「選択集」が兼実の要請によって撰述されたことは、両者の親縁関係をいやが上にも重からしめるところであるといわねばならない。かかる法然の立教開宗、その後南都北嶺からの攻撃に対し、兼実が自らの死に至るまで終始、法然を外護したことは、両人の親密性の至大なるものであったことを示して余りない。法然と兼実との結縁には、久我家と九条家の縁戚関係にある証空が橋渡しの役割をなしたであろうことが推量され得る。なお兼実と道元との間接的関係として、弘誓院教家がある。弘誓院は九条兼実の子息、京極良経の子息で正二位権大納言、藤原教家のことである。兼実は前述の如く道元の母

の父藤原基房の弟であるから、弘誓院と道元禅師とは母方の俗縁の關係にある。嘉禄元年（一二二五）九月三日出家して、法名を慈観と名づけ、別に弘誓院教家と称した。この弘誓院が禅師の観音導利院の法堂の建立に助勢し、その法座を作ったといわれる。

（四）慈円（一一四七—一二二五）をみる。道元の母の父、藤原基房の弟で、世に慈鎮和尚として知られている。青蓮院に住し、無動寺・法性寺を兼管建仁元年（一一〇二）以後四度、天台座主となっている。晩年、浄土教に帰し、法然と交宜があったといわれる。彼は親鸞の得度の師であり、吉水帰入前の師匠である。道元は母の弟の良観を頼って出家の志願を述べたのであるが、そのことについて良観は、始め道元を自分の叔父に当る慈円の弟子にする積りだったと思われるが、慈円がそのことを辞したので、座主公円について薙髪せしめることとなった。

（五）次は公胤についてである。園城寺の公胤僧心（一一四五—一二一六）は、大貳憲俊の子、智証大師十七世の法孫で、再度、園城寺正史に補せられている。建暦三年（一二一三）四月、榮西の管した法勝寺九重塔の落慶供養が行われ、道件剃髪の師公円がその導師、公胤が呪願師を務めている。公胤は元来、天台の学僧で「浄土決疑抄」三巻を撰し、法然上人の「選撰集」を駁したが、一日法然上人と宮中で会談するや、自己

の非を省し、遂に「決疑抄」を焼いて上人の門に投じた。

公胤僧正が法然上人往生後七七日忌法要の導師を為したが、五七日の夜の霊夢について、「正源明義抄」九に次の如く記述している。「七七日の導師は園城寺の長史法勢大僧正公胤、信空の諷誦あり。公胤僧正は内裏に参会せしめ浄土の不審等をあきらめ、喜悦の眉をひらくといへども、別してかれに帰伏したてまつらず。五七日の夜の子の尅にあたりて、希代の霊夢を見給ふ。よはひ八旬ばかりの老僧瓔珞細奕の衣を着し、天童に蓋をさゝせ、公胤の枕もとにたちて、しめしたまはく、汝源空の念仏の化導を不信の条、かつふは仏意にそむくべし、かの廟墳に詣して慙悔をなし、懺度をえてうくべし。われはこれこの寺の本願主智証大師なり。唱導をのぞみて滅後のちぎりをむすぶべしとしめしおはりてさりたまふと、おもへはゆめさめぬ。そのあとに異香薫じて数刻なり。よてまづ廟堂に参じて後会をちぎりたてまつり、滅後の御弟子と号せらるよし。諷誦のみきんにして改悔し、左右の眼になみだも禁じがたしとて、かたりもあへずなき給へば、聴聞のともがら各相をぞうるをしける。」（法然上人伝会集九〇四頁）同じくまた、七七日忌法要の導師をなしたことについて、「拾遺古徳伝絵」九に次の如くある。「七々日弥陀如来并阿耨多羅三藐三菩提導師三井僧正公胤、（中略）彼僧正唱導をのぞまれける事は、先年浄土決疑鈔をやくといへども、聖人嚴重の往生を聞き、かさね

て彼罪咎を懺悔せんがためなり。仏經講讀のうちに、具に決疑鈔の元起をのべ給て云、公胤今日參勤の本意は、偏に聖人を誘難せし重罪を懺悔せんがためなりと云云。座下の聴衆隨善せずといふことなし。」(前同六四二頁下)なお同文に引続いて僧正が法然の夢担を感得したことが次の如く記載されている。「然後、建保四年丙子四月二十六日の夜、聖人公胤に告たまふ夢想に云、往生之業中、一日六時尅、一心不亂念、功驗最第一、六時称名者、往藤必決定、雜善不決定、專修決定業、源空為孝養、公胤能說法、感喜不可尽、臨終先迎接、源空本地身、大勢至菩薩、衆生為化故、來此世界度々。」(前同六四三頁上)次いで公胤僧正の往生について次の如くある。「彼公胤僧正、同四年閏六月二十日、禪林寺の辺にして往生を遂畢ぬ。種々の瑞相これをしめす。紫雲はるかにふびき、音楽ちかくきこゆ。諸人目を驚し、親疎耳をそばだつ。謳歌すること仙洞後宮にをよび、帰敬すること京洛辺土にあまねかりけり。」(前同六四三頁上)公胤の夢想について「法然上人伝」(十卷伝)卷一〇(前同七三〇頁下)にも上記と殆ど同文がある。「古今著聞集」(前同九八一頁上)も、多少の文字の相違があるが、概ね同文を記載。また公胤の同夢想並にその逝去の瑞相については、「本朝祖師伝記絵詞」四(前同四九八頁)も概ね同文を述載している。

次に公胤と道元との關係に移る。既述の如く、そしてまた

周知の如く道元禪師が疑問を解決すべく、洛東禪林寺の草庵に公胤を訪ね示誨を請うたのは建保二年(一二二四)であった。その時には公胤はすでに天台から浄土に転じて、念仏行者となっていた頃である。禪師は僧正に疑團について訊ねたが、公胤は、新歸朝者榮西への參伺を指示した。この消息を師蛮は次の如く示している。「補園城長史、任僧正。嘗嫌源空唱專念法、而作決疑鈔三卷。一日与空宮中相逢、一談而遂燒決疑鈔。爾來屢往吉水、問往生法。永乎道元在睿山時、往問法身自性之旨。胤曰、此問難酬、家伝不善有仏心宗、能明此事。若欲精究、往問彼宗。」(「本朝高僧伝」十三)(大日本教全書)六三・九三中)

但、師蛮がその註に、道元が公胤を訪ねたのは建保四年で、十七歳の時であるとなしているが、これは正鵠を得たものとはいえないであろう。

公胤について禪師は「故公胤僧正の云く、道心と云ふは、一念三千の法門などを、胸の中に学し入れてもちたるを、道心と云ふなり。なにと無く、笠を頸に懸て、迷ひありくをば、天狗魔縁の行と云ふなり」(「随聞記」三)といっている。これは公胤所説の道会を肯認しているようで、實際は直実のものでないと諷刺しているようにみられる。従つてこのことからしても、公胤の思想が道元へ影響したとは考えられない。がしかし道元が禪門に入る直接的媒介を為したのは、公胤の

指示であったことは否み得ない。

(二)

(六)諸行本願義を主張した九品寺流の覚明房長西(一一八四—一二六二)は、建仁二年(一一二〇)十九歳で法然の門に入り覚明房と号し、法然上人に常随した。建永二年(一二〇七)二十四歳の折、流罪の法然に従い讚州へ赴き、建暦元年(一二一一)二十八歳、法然に常随して帰洛、翌年二十九歳の時、師の入滅に遇ってから、出雲寺住心、泉湧寺の俊苒に止観を習い、道元を深草に訪ねて問法、禅要を受けた。なのことを「浄土法門源流章」は「値<sub>二</sub>仏法禅師久経<sub>一</sub>禅学<sub>二</sub>」(「浄土宗全書」十五・六〇〇上)と記している。いうまでもなく仏法禅師は道元禅師のことである。なお栄西からも禅を学得している。著に「浄土依憑径論章疏目錄」(長西録)二巻がある。

(七)同じく法然の弟子で鎮西派(浄土宗)の二祖、鎮西聖光(一一六二—一二三八)は、「本朝高僧伝」十三(「大日本仏教全書」六二・九五上)に依ると、当時撰津水田三宝寺に禅風を宣揚して令名のあった大日能忍を訪ねて禅要を問ひ、永明延寿の「宗鏡録」に関して聴くところがあったという。このことについて、道光「聖光上人伝」に次の如に述べている。「昔有<sub>二</sub>大日禅師者、好索<sub>二</sub>理論、妙契<sub>二</sub>祖意。(中略)爰上人(私註、聖光)到<sub>二</sub>彼禅室、難<sub>二</sub>問法門。不断惑之成仏、宗鏡録之三章、

天台宗之三諦、達磨宗之五宗等也。禅師閉<sub>レ</sub>口結<sub>レ</sub>舌不<sub>レ</sub>答、而讚曰、汝是文殊師利菩薩、為<sub>レ</sub>訓<sub>レ</sub>我而来歟云云、禅師門資、皆赧然而不<sub>レ</sub>輔也。」(「浄土宗全書」十七・三八七上)(文中の割註は省略) いう如く大日能忍が答えに窮し、門人達らも赧面したように記述している。このことは聖光の学識の深いことを反証すべく伝記作者が配慮したものであるとも看取される。また良忠「徹選扱鈔」巻上に、能忍は聖光に対し、「稀名拍子也、舞折拍子也」(「浄土宗全書」七・一一四上)といったところある。即ち称名の真意を理解しないばかりではなく、称名を以て念仏踊りの拍子であると茶化した暴言を吐いたことにならざるであらう。

(八)然阿良忠(一一九九—一二八七)は法然の孫弟子に当り、浄土宗鎮西派第三祖、勅諭は記主禅師、光明寺開山である。この良忠が興聖寺に道元を訪ねている。これを縁ともして、良忠が道元の鎌倉行化について、波多野義重と共に裏面にて運動したことが推断される。これは良忠が禅殊に道元の人とその禅に魅力を感じ、鎌倉に道元を招き自らも参禅問法したのものである。「然阿上人伝」によると、良忠に關し「又歴<sub>二</sub>参長楽榮朝永平道元、問<sub>二</sub>教外別伝之宗旨首経円覚之法門<sub>一</sub>」(「浄土宗全書」十七・四〇七下)とある。良忠の参伺の際、榮朝・道元の二禅師が如何なる説示をなしたか、念仏に対して如何なる感度を示したかは不明である。が道元について大陸

の事情を聞いたであろうことは、充分推量され得る。

(ウ) 覚信尼は親鸞の末女であるが、親鸞に伴われて上洛、やがて久我通光に仕えた。通光は太政大臣にまで進んだ人である。後、尼公は日野広綱に嫁し、一子光寿(覚如の父)を生誕しているが、久我家につかえた年数は明らかではない。

親鸞往生時、覚信尼は三十九歳であるが、その後、小野宮禅念と再婚している。そして文永三年(一二六六)四十三歳の時、一名丸(唯善)を儲けている。禅念は小野宮少将具親の子であると伝えられるが、正嘉二年(一二五八)以来居住していた今小野の敷地の南隣にいた照阿弥陀仏は、覚信尼の旧主家久我家の出身であると考えられる。しかも親鸞や尼公と関係の浅くないと思われるいや女を召し使った女性である。また禅念の姪であつて久我具親の孫にあたる女性があるが、その女は、尼公の旧主久我通光の子雅忠に嫁している。このことから、覚信尼と禅念との結婚には、久我家、あるいは照阿弥陀仏が介在していたものとも考えられる。

(ロ) 「行仏威儀卷」に、行仏威儀の無礙なる活動を説明するのに對し、「あるときは、一道の放屁声なり、放尿香なり。鼻孔あるは麤得ず、耳処・身処・行履処あるに聴取するなり。」と提唱されている。これについての註に關連して、経豪は次の如くいつている。「古も仏も乾屎橛なんどいう詞あり。故嵯峨の正信上人、仏を乾屎橛、殺仏なむど開山説法の

時、仰せられたりけるを聴聞して、あなくちおし、仏をかか  
るものに喩えらる、禅宗(は)おそろしきものかな、とて落  
涙せられけり。この事を開山もれ聞いて、あれほどの愚痴に  
て、人に戒を授け、帰依せられる事、不便の次第なり。我も  
いや目ならば、落涙しつべき事なり、と仰せられけり。見解  
の黒白これをもって准じ知るべし、比興に物語るなり」(註  
全三・四二八)と述べている。嵯峨の二尊院を開創し、師法然  
を開山とした正信房湛空(一一七六―一二五三)が、道元の説  
法を聴いて恐ろしいものだとして涙を流したというのであ  
る。即ち道元禅師の説法中に、雲門文偃(一八九九)が如何な  
るかこれ仏と問うた僧に對して、「乾屎橛」と答えたこと、  
南岳懷讓(六七七―七四四)の、汝もし坐仏せば即ち是れ殺仏  
なりとの提示に就いての落涙である。それを聴いて道元は、  
その愚痴の程を反批判しているのである。

(一) 法然の弟子、空阿弥陀仏(明遍)(一一四二―一二三四)に  
ついて、「随聞記」二に次の如き讃述がある。「伝へ聞く、故  
高野の空阿弥陀仏は、本は顯密の碩徳なりき、遁世の後ち、  
念仏の門に入て、後に真言師ありて、来て密の法門を問ける  
に、彼の人答まで云く、皆わすれおはりぬ、一字もおほへず  
とて、答へられざりけるなり。是らこそ道心の手本となるべ  
けれ、などかは少々覚へであるべき。然あれども、無用なる  
事をば云はざりけるなり。一向念仏の日は、さこそ有べけれ

と覚ゆるなり、今の学者も、此の心あるべし。」明遍の専修念  
仏に対する賞揚である。また藤原家経の子、教雅、花山院宰  
相入道、僧名身阿弥陀仏は建長三年一月五日、永平寺に道元  
を訪ね、靈山院の庵室で道元と仏法を談じている、そのこと  
も付記して置く。

（註は省略）